



# NO.7

April 30, 1998

## CIEC Newsletter

### 第5・6回CIEC研究会のお知らせ

5月30日(土) 13時30分～17時  
大学生協会館(東京杉並)

教育学部における情報教育の現状と課題  
(13時30分～15時00分)  
小林 昭三氏 新潟大学教育人間科学部

大学における情報教育の展望  
- 小中高の現状を踏まえて -  
(15時～16時)  
赤堀 侃司氏 東京工業大学  
教育工学開発センター  
大学院社会理工学研究科

討議 (16時～17時)

5月23日(土) 午後  
コープイン京都

物理教育テキスト研究会  
話題提供者  
石井 晃氏 鳥取大学工学部  
徐 丙鉄氏 近畿大学工学部  
酒井 敏氏 京都大学総合人間学部

詳しくは事務局にご連絡いただくか、ホームページをご参照ください。また、準備の都合上、出席を希望される場合は事務局までご連絡ください。

### CONTENTS

・第5回研究会のお知らせ	1
・CIEC会員状況	
・総会開催案内	
<ニュース・トピックス>	
・第4回CIEC研究会報告	2
<会員コラム>	
・企業所属会員紹介	6
<ML討論>	
・メーリングリストciecから	8
<CIEC活動報告>	
・活動日誌	10
・98PCカンファレンスご案内	10
・宣伝お知らせのML	12

'98年度CIEC総会を開催いたします

日時 7月28日(火)  
会場 日本福祉大学 半田キャンパス  
(愛知県半田市東生見町26-2)

'98PCカンファレンス第1日目に行います。詳しくは6月初めに郵送でご案内いたします。

CIEC会員状況 98.4.30現在  
団体会員 68団体(企業21 生協47)  
個人会員 612名  
(教員371 大学職員28 院生21 学生10  
企業27 研究員5 生協職員148 その他2)

CIECニュースレター  
1998年 4月30日発行  
発行：CIEC(コンピュータ利用教育協議会)  
編集：CIEC運営委員会  
〒166-8532東京都杉並区和田3-30-22大学生協会館  
TEL 03-5307-1195 FAX 03-5307-1196  
e-mail:ciec-jim@ciec.or.jp URL:http://www.ciec.or.jp/

## News & Topics

### 第4回研究会報告(概要)

日時：3月28日(土) 13時30分～17時  
場所：大学生協会館2階、204・205会議室

テーマ1：  
CSCLトロント学会報告と講義での実践報告

講師：三宅 なほみ 氏  
(中京大学情報科学部認知科学科教授)  
益川 弘如 氏  
(中京大学情報科学部学生)  
司会：松田 憲会員 (立命館大学文学部教授)

テーマ2：  
コンピュータ科学から見た  
情報教育とキーボード

講師：大岩 元 氏  
(慶応義塾大学環境情報学部教授)  
司会：三根 浩会員  
(同志社女子大学短期大学部教授)

第4回研究会は、国際委員会からの提案で三宅先生を、98年のPCカンファレンスのシンポジウムにつなぐお話をさせていただくために大岩先生をお招きいたしました。

講師の話聞く前に、順番に参加者の自己紹介をして、どんなことに興味をもった人々が集まっているのかお互い知り合ってから、なごやかに研究会がはじまりました。司会者のご協力を得て、概要をまとめました。

事務局の文責ですので多少のずれはご容赦のほどお願いいたします。研究会の全記録は5月末頃、別冊にてお届けいたします。

#### 三宅なほみ氏講演概要

CSCL (Computer Supported Collaborative Learning) は、1995年アメリカで発足した学会組織で、コンピュータを



協調学習に役立てるにはどうしたらよいかについて話し合う研究会。

アメリカのACM (American Computer Machinery) という大きな学会の中に CHI (Computer Human Interaction) と呼ばれる学会組織があり、その中の CSCW (Computer Supported Cooperative Work) という組織が正式にCHIのサポートを受けた学会として1986年設立している。

CSCLという言葉が最初にCHI学会のTutorialとして出てきたのが1992年頃で、CSCWの一部だったり、職業教育の一部だったり、あるいはCHIのインターフェースの教育の中の小さな部門であったりしていたところ、コンピュータを教育の中で支援する道具として考える必要があるとして、アップルその他の会社からのサポートを受けて試みに発足したのが1995年である。

95年の初回では発表の8割が情報技術に頼った、しかもお金のかかった方法で行われたが、2年後の昨年の第2回大会では8割が、OHPやスライドなどを組み合わせた複合的な発表手段に戻るといふ、発表形態に変化があった。派手な装置から日常的な道具へ変わってきた。

「これがあつたら何ができるだろうか」から、「こういうことをするのに何が使えるだろう」という変化は時間をかけてみてはじめて見えてくるものだという気分が学会の中に感じられた。

人の知というのは、どこに行っても、いつでも計算式に表されるように変わらないものではない。場に即応して変化していくものであるというような知の捉え方、また、知の伝達とか新しい知を産み出すための、教えとか学びについての考え方が、変わってきている、「一人の人が一つのことを一人でわかる」ことより「たくさんの人といっしょに、たくさんのことを、たくさんの方でわかる」ことが必要と考えるようになってきている、というお話であった。

学校適応的な学び方から、学校という場と社会という場を融合して(社会の学校化)、知のコミュニティーを





形成しなければならないこと、ネットワークや、情報技術を利用することで、学校と社会が協調作業やデータの共有ができて、結びつきやすくなっているのではないかと指摘された。

CSCLで発表されたような、十分なサポート体制や高速な機械を使っているが、普通の教師が普通の学生相手にただ時間と労力を山ほどかけた事例の紹介であるという三宅先生のコメントのあとで、中京大学生の益川さんから、以下の報告があった。

#### 益川 弘如氏 報告概要

ReCoNote ( Reflective Collaboration Note ) という自分のノート、参考資料、他人のノート、グループノートなどをWebのページ上に構成するとともに、それらを相互リンクすることによって共同作業の支援を行う「協同作業支援システム」の開発と利用観察について報告があった。( 詳細は省略 )



さらに、三宅なおみ先生にマイクが戻って、いい教科書を何年も使い回して1ページ目から最後のページまできちんと読んで練習問題もやったら知識が身に付くという時代ではないという以上、新しい知識、今大事なコンテンツを押さえるために、そのコンテンツを求めていかなければならない。こうなったら学生も教師も殆ど横並び一線で、一緒に頑張ってお互いに刺激しあっていくというような環境が必要になると思うと述べて、先生のお話は終わった。

#### 質疑・討論のまとめ

報告のあと、活発な質疑・討論が交わされたが、以下は、その簡単な要約です。すべてを網羅したものではありません。

最初に、三宅先生から、コンテンツを確実に取り込むための仕掛けとして、企業などとの共同プロジェクトなどが有効である、という話があり、質疑に入った。

質問としては、「他人の意見や発表を共同作業の中で取り込むと、レポートの盗作などと同様の問題は生じないのか?」「コラボレーションを進めるためには、それなりの仕掛けやスキルが必要ではないか」「認知科学の成果は何か」「他人が自分のノートに書き込むことへの不

快感はないのか」等々があった。

これらに対して、三宅先生の方からは、「他人の意見や発想を取り込み、編集する能力も大切、という発想が必要」「テーマの設定や運営が適切でなければ自然淘汰される、学生が持続した興味と関心を保持できないプロジェクトは、その学生に適合していなかったと言えるのではないか」「認知科学の成果は、ある1つの見方が出来るようになること」「ReCoNoteでは、実際に他人のノートに書き込むことはほとんどなく、基本的にグループノートを使用している」などの答えがあった。

その他、参加者からは、自分の教育実践の経験からの幾つかの質問が出され、それぞれに対して三宅先生からの丁寧なコメントがあった。

#### 大岩 元氏講演概要

人類の第1歩はことばをいただいたこと、次に文字を使うようになり、今、3歩目としてコンピュータという道具を手にしてしまった。それは人の書いたプログラミング通りに人間の100万倍以上の速さで処理する能力をもつ。その



コンピュータが社会をどう変えるか、それに伴うコンピュータリテラシー教育の問題、指導する教員養成の問題、初等中等教育のカリキュラムの問題、次々と問題が挙げられる。

概念を身に付けさせる欧米型の教育とくらべて、日本の教育は考える学問の数学でさえ、入試の競争に勝つために、解法のパターンを組み合わせて計算するという訓練になり、人間をコンピュータ化するような教育をしている。コンピュータが発達すればそのような人間は不要になってしまう。

コンピュータの魅力は自分の思い通りの道具として使えることなのだから、コンピュータリテラシーとは、プログラムが書けて、コンピュータを思いのままに操れるようになることというのが主張である。プログラミング教育は、実用プログラミング言語の修得ではない、たった5行から10行のプログラミングにも、問題解決学習型のよい教材としての期待ができないが。

情報教育を行う教師はコンピュータサイエンスを学んでいることと、教育のしかたを身につけていることの両方が必要である。

もう一つ提唱していることは、情報教育の出発点として、タッチタイピングの訓練である。自転車は練習しないと乗れないが、キーボードはすぐに打てる。しかし正しいタイピングを最初に訓練すれば、訓練しなかった場合に比べて2から3倍のスピードで入力できるようになる。

#### 質疑・討論のまとめ

- ・キーボードが腱鞘炎になるような形状であることは問題だ。
- ・コンピュータサイエンスを教えることが情報教育ではない、キーボードの訓練の後、日本語ワープロを使って日本語による自己表現教育をすることが先のように思える。
- ・いや、コンピュータの使い方は情報教育ではない。ワープロを使わなくても表現の教育はできる。仮名漢字変換のしくみを教えるのは情報教育でないとは、必ずしも言いきれない。コンピュータリテラシーが曖昧でわかりづらくなっているようだ。
- ・大岩先生のおっしゃるプログラミング以前のことで、みんな苦労している。キーボードだって、機種によってキーの配列が違う。今は技術の先端に人間が合わせている状況で次の世代を同じ状況に巻き込まないためにしなければいけない地道な仕事はたくさんあるのではないかな？
- ・コンピュータの本質を無視して過大な要求を出すのでおかしくなる。コンピュータ環境はまだ不完全でひどい状態にある。人間中心の立場でものごとをやらなければならない。

## 第4回研究会 感想

岩手大学工学部建設環境工学科  
宮本 裕会員

三宅先生の講演にはフレッシュなものを感しました。たぶん理科系の私は文科系の世界の話に、違う価値観や新しいものの見方を教えられたからでしょう。

(質疑応答のときに私があえて、電子メールで課題の回

答を集めると、学生が同じ回答をするという例を出したのは、本学の情報工学科の先生の発言の紹介ですが、同時にインターネット世界におけるオリジナル性尊重と他人のアイデアを発展させる能力のことを指摘したかったからです。

三宅先生は相手の意見に対しても、ストレートに反論せず、やんわりと違う立場の考え方も紹介していました。あの答弁は学会発表では参考になります。早速マネしましょう。

(ここから具体的な感想に)

さすが専門家、キーワードが出ました。「知の分散」、「知の共有」、「自分の足りないところを補いあう」分野によっても違うと思いますが、三宅先生の分野では学生の新しい感覚とか視点が、教師にも良い刺激を与えることが多いのですね。私の専門の工学では、たくさん知っている教官の方がリードしている傾向はあります。でも、学問体系の整った伝統的分野と、絶えず進歩が繰り返され教科書も1年たったら古くなる分野では、大分傾向がちがうようです。

前者の学科は保守的体制的(偉い教授の方が知っている)で、後者の学科は進歩的民主的(学生の方が知っている)と言われます。

はたして皆様のところではいかがでしょうか。

知の共有リンクに他の先生やOBの割り込みがあって活発になる、というのは愉快ですね。

非常勤講師の先生に他の先生もシラバスを公開すべきではありますが、なかなか自分の講義のシラバスを公開したくない先生もいますね。

結局、情報公開、協調的な学習方法、学生の活発な書き込み等はそれを受け入れる雅量のある教師にして実践できること。学生のPCやネットワークのパワーもうまく活用すれば教育研究は進む。

人のレポートを丸写しするのは、さすがに三宅先生も認めていないようです。他人のものを参考にすることはあっても何かプラスを入れることが、本人のためにも必要ですね。

私の宿題では、たいてい計算問題なので正解は1つ。でも、難しい問題を出すと、全員間違いということもある。そういう時でも、間違いのグループが3~4つの集団に分



けられる。(グループ内では同じ間違いをする)1人だけユニークに間違っているのを私は評価するわけです。

みんな自分の部屋に自分の意見を書いて、関係する他人の意見にはリンクするだけなら相手はそう目くじらを立てない(?)が、世の中には自分の意見に何か批判めいたことを言われるだけでもナーバスになる人もいます。そういう人はネットワーク社会では生きていけない(?)

公的(パブリックな)掲示板にはなかなか書き込めない。みんなが書く雰囲気なら、自分も書くのだが。そういうときには、とりあえず自分の部屋に書いてみる。そして、みんなの反応をみるというのも無理のないところでしょうか。

こういうことができるには学生も全員簡単に電子メールが使える環境にないといけません。三宅先生の方式は大学院の講義や演習で使えそうに思いました。私の学科でも4年生以上は電子メールが使えるが1~3年生には教育端末室でネットワーク講習会を自分(宮本)でしないといけません。

4月から教室の大画面で私が作ったホームページなども見られるようになります。インターネットで橋の写真や新技術紹介も教室に持ち込めるのです。いろいろチャレンジしたいと考えています。CIECの雑誌はホームページの活用には参考になることが多いと思います。

大岩先生の講演は前にも同様な講演を聞いたことがあるので、私には新しい発見はありませんでした。たとえば平成元年に東北大学で開催された文部省主催情報処理教育研究集会報告書にも、同じようなことが書かれています。

たぶん大岩先生も三宅先生とそう違う意見ではないのに(研究会を盛り上げるために)対立点を明確にするため喧嘩口調になったのでしょ。

要するにコンピュータ利用の専門教育では、コンピュータはツールなのだが、進歩する技術に学生が卒業後もついていけるような教育をすべきである。だからいつになっても価値がある原理本質を教育すべきである。かつ実際に役に立つ応用面も大事にする。柔軟な発想、すみやかに新しいものを受け入れる積極性を育てる。そしてコンピュータはどういう使い道があるか、どう使え

るかをたえず発展的に考える姿勢がほしい。

プログラミングのとおり動くのであって人間が感じたようには動かないというのは言い得て妙。エレベータに乗っても行き先ボタンを押さないとエレベータは動かない。

昔のFORTRANのミスですが

A(1) = 0

は実行してくれるのに、

A(I) = 0

は実行してくれません。

DO文をつけないといけません。

カッカしている私にはわからなかったのを教えてくれた相談員は偉かった。

しかし、プログラミングの通りに動くのではなく、それをコンパイルしたりインタープリターした結果機械語になったので、その機械語の通りに動くのですね。このあたりのコンパイルの特性や限界を考えたら翻訳技術に相似するのかと思いました。

(研究会の帰りに新幹線の中で読んだ新聞に書かれてあったことを紹介します。

\*\*\* 人材輩出の環境について(紙面批評、産経新聞、1998.3.29.)\*\*\*

長年情報産業にかかわってきた体験によれば、

「徹底した基礎教育」

「フィールドワークに代表される現場での体験」

「異文化に接触することによって受ける刺激」

の3つが創造性のある人間の形成につながっている。

\*\*\*\*\*

つまり、情報処理教育も

将来発展するための基礎教育

応用体験

教官学生どうしの違う観点からの意識交流が必要である。これは28日の講演のポイントと見事に一致しています。

## Columns

### 研究会に参加して思うこと

京都大学大学院 人間・環境学研究科修士2回生  
村上 正行会員

京都大学大学院人間・環境学研究科修士2回生の村上正行と申します。昨年のPCカンファレンスで発表させていただいたことがあります。3月に行われました研究会に出席させていただきました。なぜ、京都から東京までわざわざ出向いたのか？

学部時代に数学や計算機科学を学びましたが、元々関心の高かった教育・認知科学に研究対象が徐々にシフトしていきました。それで、今までは、様々な文献を読んで基本的なことを勉強してきました。しかし、やはり文章からではなく、第一人者の方のお話を直に聞き、自分の力にしたいと思い、参加しました。

三宅なほみ先生のお話を聞き、自分の進むべき方向はまちがってはいないという思いに至りました。お話から感じられた三宅先生の考えと、私の考え（コンピュータはあくまで道具であるということ、刺激を与えつづける手法では、刺激を無限に派手にしなければならぬこと）に共通点を見出せたからです。また、他の方のいろんな考えに触れることもでき、自分にとって非常によい経験になりました。

私がいつも注意していることは「子供の立場に立って物事を考えられるか？」「いいと思ったら、実際に行動できるか？」の2点です。

「コンピュータを使うこと」が本質ではなく、「コンピュータを使って学ぶこと」を子どもの視点から考えていくことが重要だと思っているので、上の2点を胸に、フットワークの軽い、理系と文系の間に立てる研究者を目指して頑張りたいと思っていますので、今後ともよろしくお願い致します。

今回は今まで、このNewsletterの誌面に登場の機会がなかった企業の方々に執筆をお願いしましたところ、貴重なご意見を頂戴いたしました。CIECの設立趣旨にもありますように、CIECが教職員や院生・学生に限らず企業の方々との交流を深めるためのよりよいインターフェースの役目を果たしたいものです。

### '97 PCカンファレンス後の 大学訪問で感じたこと

#### 質問要望箱の設置を望む

伊藤忠テクノサイエンス株式会社  
ビジネス・デベロップメント部  
石倉 健司会員

私ども伊藤忠テクノサイエンス株式会社は、SunワークステーションやCiscoルータ等を主力商品として、システム販売・SIコンサルティング・保守サービス等を行っている会社です。昨年のPCカンファレンスに、初めて企業ブースに出展させて頂きました。

PCカンファレンス以降、大学を中心に無線LANの評価・貸出を兼ねまして十数校に訪問させて頂きました。訪問先で先生といろいろお話をしていると、こういう使い方はできないか？とか、いまこんな問題で困っている、と言うような御相談を受けることが多々ありました。すべてにお答えはできてないかもしれませんが、私どもに取りましては非常に参考になりました。私(企業側)には見えない実際に使っているユーザサイドにしか見えない問題がいろいろありました。

CIECのメーリングリストに業者向け質問要望箱みたいなものがあれば、もうちょっとお役に立てるかもしれません。

これからも、いろいろな商品をお持ちしてお伺いしようと思っておりますので、いろいろなお意見ご要望を頂けますよう宜しくお願いします。



## 企業側からのCIECへ期待すること

株式会社ヒューコム  
匠 英一会員

産学共同プロジェクトへの参加ができる仕組みが重要となっています。筑波大学では各研究室の研究テーマや実績・特許などの情報提供サービスを企業向けに行なっています。CIECでもソフト委員会などを中心に、共同開発提案を内外に向けて発信できるコーディネーターチームを結成することが可能だと思えます。すでに米国では「パートナーシップ法」ができて任意団体であっても広く営利活動を展開していますが、日本でも通産省などが「大学連携推進室」というのを設置し、現行法の枠内でも文部省と協力しながら大学リソースを社会還元できる方向に動いています。そのような流れからすれば、CIECが民間の立場から会員である大学研究者の知的所有権を守りながら、企業のニーズを拾い出し開発に結びつけていく役割が求められてきているのではないのでしょうか。

まず手始めに、現在の協賛企業会員を中心に、この種の準備委員会を持ち共同開発のルール創りをすること。次に大学の各研究室で希望するところから、開発テーマや特許等の情報をアンケート等で収集し、これを会員向けにホームページなどで公開してはいかがでしょうか。

## CIECに期待する

(株)ともクリエーションズ  
渡邊 智子会員

私が教育とコンピュータに関わってもう15年になる。その間ハードウェアはもとより、社会の情勢がめまぐるしく変動し、15年前には想像すらできなかったほどコンピュータは私たちの生活に入り込んでいる。教育現場へのコンピュータの導入は一般企業よりは進んでいないが、それでも対象を大学に絞るとかなりドラスティックな変化が起きている。コンピュータ教育も従来のプログラミング言語教育からコンピュータリテラシー(コンピュータを使える人間)育成のための教育に重点が移ってきているようである。これからは「どのようにコンピュータを使いこなすのか」「何のためにコンピュータを使うのか」を考えられる学生を育てていくことが重要になって

くるであろう。

私は昨年ある仕事で、大学のコンピュータシステム、特にネットワークに関して12大学にわたってヒアリング調査を行った。その調査で感じたことは、文系理系を問わずどの大学でもハードウェアやネットワークなどのインフラストラクチャを整備しても、指導者の教育が追いついていないということである。また「ネットワーク」時代なのに、各大学間の情報交換が進んでいないことも痛感した。そこでCIECへの期待であるが、全国の大学関係者を集めて大学・学部を超えた情報交換の場を作ってほしい。コンピュータ教育を担当している教員ばかりでなく、情報センターの職員の方たちも含めた交流はとても意義があることだし、それは教員・職員・学生がメンバーとなっているCIECでなければできないことである。

大学にネットワークが普及し、なおかつ外部と接続を始めると、これまで以上にセキュリティが問題になってくる。実施した調査でも、いたずらの電子メールには各大学で悩まされているという報告がでている。これは学生の学籍番号をそのままアドレスにするなど、大学側の安易な方策によるところが大きい。インターネット時代に突入した今こそ「情報倫理(最近はネットワークとエチケットを結合してネチケットと言われている)の教育に力をいれていかなければならない。「社会に役立つ人材」を供給する機関である大学だからこそ、コンピュータリテラシーはもとより情報倫理をわきまえた人材を養成しなければならない。情報倫理教育についてはCIECでも特に力をいれて取り組んでいただきたい問題である。

またネットワークを介して大学が外部とのつながりをもつ場面が増えてくると、大学が情報発信地として期待されるようになってくる。生涯学習に対するニーズは年代性別を問わず広がりを見せていて、各大学で開催している公開講座は毎年急激な伸びで増加している。(当社でここ数年間にわたり全国の大学の公開講座のデータベースを作成しているので実態がよくわかる)これから「冬の時代」を迎える大学にとって、地域社会との交流は欠かせない施策であろう。このような社会情勢の中で、地域社会と密着している生協とも協力できることはCIECの強みだと思う。「'98PCカンファレンス」の分科会の中にも「ネットワークを利用した市民活動の推進」というテーマが掲げられているが、CIECには大学と地域社会との橋渡しになるようなイベントを今後も企画していただきたい。CIECの活動が、「大学の活性化」につながることを信じ、私も微力ながら協力させていただきたいと考えている。

## ML 討論 ciec@ml.ciec.or.jp から

### 表現力育成を目指す動きを、 CIECの中で展開できるか？

富山大では、大学入学初年度に、読む、書く、話す、調べる、などの学問のベイシック・スキルの向上を目的とした少人数形式のゼミナールである言語表現科目（日本語表現法科目）を教養教育科目として93年に開設し、成果を得ている。

特長として

- 1) 理科系文科系を問わない全学部からの出向での担当教官
- 2) 全学部で、「情報処理科目」との選択必修科目として実施
- 3) コンピュータを使う授業と、そうでない授業が併存している

などの点が挙げられる。

参考文献 or URL 『一般教育学会誌』第17巻、第2号 (1995年11月)

<http://hyogen.edu.toyama-u.ac.jp/hyogen/index.html>

その設立と運営にかかわっている筒井会員から次のような提案があった。

全国的に類似科目の新設が見られ、「日本語表現法科目実施（予定）大学・短大間の全国的な連携」がCIECを中心にできないか。コンピュータとは無縁な方が多い「日本語表現法科目」に携わる関係者を含めた活動をCIEC内で展開するのは難しいという感触を持ちながらも、日本語表現法科目のような表現力育成を目指す動きは、CIECにとってもそれなりの問題提起をするのではないか。「ツールとしてのコンピュータ、コンピュータはコンテンツ形成のツールである」という原則を踏まえるのであれば、コンテンツ形成という目的において、表現力の育成は不可欠だと思う。

近年、コンピュータはうまく使えるけれども、文章を書かせたらかなりひどいとか、対人コミュニケーションに問題があるという学生も増えている。コンピュータを普及させることは大変いいことだと思うが、情報教育の大勢はコンテンツ形成にまだ有効な処方箋を見いだしていないのではないかという気がする。

でも、CIECの発展にとってはやはりなんらかの対処をする必要があるような気がする。情報教育関係者にとどまらず、大学で教育に携わる教官の多くがこうした問題を抱えているが、打開策を見いだせないまま、

今日に至っているのではないか。(ciec910)

卒論ではじめて特定の主題をもつ長文作成を経験する学生が多く、長文作成法の指導は不可欠だが、コンピュータを利用することで文書作成法が変化したのかどうか、また、文書の内容や文章スタイルが変化したのかどうかそのようなテーマなら、CIECの中で十分取り上げが可能と思う。(ciec912)

「日本語表現」「外国語教育」「学習者中心」等コンピュータの有無とは関係なく存在する普遍的課題をCIECでは積極的に取り上げるべきだし、CIECに所属しない方々との連携も必要(ciec913)

人間の言語生活の中の「おしゃべり」という領域から「書籍を読み文章を書く」という領域に引き込むために、メーリングリスト等ネット上での言語生活は有効ではないか。加藤典洋著『言語表現法講義』（岩波テキストブック）の中で、小中高校の『書かせるだけで、読んであげない教育』を告発しているが、ネット上での発言は多数の人に読まれることを期待して書き込むことにポイントがある。

日本語表現教育不在に対して、情報教育の問題提起と同様に、大学のみならず、小中高校での教育段階でもどうするか議論が必要ではないか。(ciec914)

木村泉著「ワープロ作成術」岩波新書の紹介。ワープロ利用のよくない例としてまず、レイアウトの凝ってしまうこと、以前作成したものの編集より消しゴム利用のし過ぎがある。(ciec915)

### 理科ばなれと大学入試

雑誌「科学」(岩波書店)の最新号にアメリカの「理科はなれ」事情の報告がある(ciec945)

横浜国大小論文試験問題速報(ciec946)

高等教育フォーラムのホームページ(<http://www.komaba.ecc.u-tokyo.ac.jp/cmatuda/>)の紹介記事を、他のメーリングリストより転送。高等教育フォーラムのホームページには





1月5日におこなわれ、理科教育メーリングリスト (<http://rika.ed.ynu.ac.jp/>) や新聞、週刊誌などでも関連する話題が取り上げられた、シンポジウム「日本の理科教育が危ない」の情報が載っている。

立花隆氏が教育を論じたページともリンクがはられている。主宰者は、東京大学教養学部生物の松田良一氏。

呼びかけ文より

“日本の理科教育が危ない

学習指導要領の改訂（平成元年策定、6年施行）にともない高校や大学の教育現場で様々な変化が起きています。このホームページは現在進行中の次期学習指導要領（平成15年施行予定）の策定作業を念頭に入れながら、理科の教育現場からの意見や問題点の指摘、改善策の提案等を掲載し、社会に問うことを目的とするものです。有志の方々の御投稿を期待いたします。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。”(ciec947)

ciec859のその後。新潟大が平成10年教育学部が教育人間科学部に改組するがその1年後からの入試の方法について文部省から個別学力検査を行わないこと、出題教科と科目数を減らし、総合問題が望ましいこと等を入試関係者に通知。その通知文の紹介。(ciec965)

高等教育フォーラムホームページより、ある教育の駒場の総合図書館前での受難の投稿記事紹介。(ciec967)

東大後期数学3、横浜国大入試担当者の話、小中高校の理科教育等の話題  
入試と理科はなれについて意見を異にする人々の間で電子討論をしたらどうか (ciec967)

制度を変えなければ、日本の教育は変わらないという一般論への疑問がある。個人、学校、社会、行政に至るすべての段階で入試を重視するあまり、最終的に行政の限度を超えた介入にならざるを得ない図式となっている、日本の教育に対して悲観的にならざるを得ないという感想。(ciec966)

子どもの減少に伴い教育の密度（教員数）を増やすチャンスなのに、教育部門がリストラの対象とされることが、悲観的なポイントではないか。次々と制度をいじり回すのは、悲観的本質から関心をそらす効果しか生まれない。このようなスタートは、国が共通テストを開始した時期に符合する。そ

の結果、入試はますます日本社会の重要問題となり、行政の重大関心事となった。共通テストのような集中化システムは所詮は不安定平衡になり必ず問題が発生し、拡大再生産につながる。それを、短絡的に立て直そうと連続的に試行錯誤しているうちに、ますます悪い結果に導くという、悪循環が始まっている。それには分散的で、改良の方向で安定化しやすい、入試や教育のシステムづくりが必要だ。情報化やインターネットは入試や教育のシステムにどんな役割をはたすのか。(ciec968)

## その他

Newsletter No6の寄稿記事「大学の情報教育の課題とCIEC、大学生協に期待されること」の補足資料。「小・中・高一貫情報教育に関する学習指導要領への提案（情報工学関連学協会連合WG）」の資料が、情報教育学研究会（IEC）のホームページ <http://www.psn.or.jp/iec-ken/index.html> の「情報教育に関する資料」にあった。情報教育学研究会（IEC）は、“情報活用能力・情報リテラシー・情報活用の基盤能力の育成に関心のある人が毎月1回大阪市内にある研究会場に集まり、情報教育の研究と推進を行っている。ネット上での意見交換も大歓迎とのこと。似たような組織と互いに交流したらどうか。(ciec923、924、925、931)

98PCカンファレンス会場日本福祉大や、半田市関係の話題 (ciec935、ciec939)

時節がら、確定申告の話題 (ciec941)

W3 コンソーシアムで、Web ページでの数式記述に関する勧告案が発表  
Web ページ内のみで数式表記を可能にするのみでなく、ある範囲内においては、その数式の実行も可能にするもの URL : <http://www.w3.org/TR/PR-math/> (仕様書) <http://www.w3.org/Math/> (ciec942)

NTTのOCNの教育機関向けサービスについての情報 (ciec943、ciec944)

電子メールで数式を書くための簡単な手引き草稿の掲載 (ciec948、949、950、951、952、953)

## CIEC 活動報告

## お知らせ

### 活動日誌 (1998年1月～4月)

- 1月23日 奈良会長 日本福祉大諏訪学部長訪問 PCカンファレンス開催依頼
- 1月31日 '98PC カンファレンス第1回実行委員会  
大学生協マーチャンダイジング情報にCIECソフト委員会が行ったソフトアンケートまとめを掲載
- 2月13日 CIEC個人会員レポート募集要項発送
- 2月19日 学生メーリングリスト、CIECホームページ公開掲示板に繋がる。「ホームページコンテストどうしようか」、「ユニックスの教育方法について」など発言が急速に増え、メーリングリストらしくなってきた。
- 2月21日 事務局会議(会員加入促進月間への準備、他)
- 2月27日 '98PCカンファレンス第1回企画調整会議
- 3月17日 お知らせ・宣伝用メーリングリスト information@ciec.or.jpの立ち上げ
- 3月28日 第4回研究会(三宅なおみ氏・大岩 元氏)  
'97PCCシンポジウムまとめ座談会(パネリストの三宅氏、佐藤先生、司会の佐伯氏、CIEC会員代表して一色会員、岡会員、松浦会員、湯浅会員)書籍化6月末の予定で準備進めている。  
カンファレンス委員会
- 3月24日 会長、コンピュータウェアヴ表敬訪問。  
会長事務局打ち合わせ
- 3月29日 会誌編集委員会(4号編集状況チェックと5号方針の検討)
- 3月31日 '98PCCレポート応募締め切りレポート追加募集を決める
- 4月 3日 PCカンファレンスニュース3号発行(追加募集の案内)
- 4月 7日 会誌巻頭インタビュー(立教大学 古瀬幸広氏)  
'98PCカンファレンス第2回企画調整会議(ポスター第1次案、各企画内容進行状況の確認)
- 4月17日 '98PCCレポート追加応募締め切り
- 4月18日 '98PCC分科会編成会議
- 4月24日 事務局会議(総会準備スケジュール)
- 4月28日 会計監査

### '98 PC Conference 開催

日時 7月28日(火)～30日(木)  
会場 日本福祉大学 半田キャンパス  
テーマ コンピュータ利用教育の現状と課題  
----コンピュータネットワークの普及の中で----

1993年にPCカンファレンスが開催されるようになったが、その当時から私たちは情報処理教育や情報リテラシーの育成などについて、様々な工夫と努力を重ねてきています。ところが、その間にWindows95やOS8が発表され、PCのハードとソフトの環境が大幅に改善されてきたにもかかわらず、教員や学生が抱えている基本的な問題はあまり改善されていないかのように感じられます。そこで、98PCカンファレンスの全体テーマとしては、カンファレンスの初期のテーマに立ちかえるという意味合いを込めて「コンピュータ利用教育の現状と課題」とし、これにこの5年間において一番大きな環境変化である「- コンピュータネットワークの普及の中で - 」という副題を添えることになりました

参加費 一般 5000円 学生・院生 2000円  
レセプション代 別途4000円

詳しいリーフレットは5月下旬会誌4号と  
いっしょにお届けいたします。

### 原稿募集

CIEC会誌「コンピュータ&エデュケーション」  
5号(11月末発行予定)の原稿を募集いたします。

募集締め切り8月20日

とくにコンピュータやネットワークを活用した教育・研究に関する実践的具体的な原稿を歓迎します。原稿の種類は下記のようになっています。投稿する場合には原稿の種類をご指定下さい。

- ・コンピュータと教育・研究(活用事例)  
図表を入れて刷り上がり4ページ(8000字)以内
- ・Software Review  
図表を入れて刷り上がり4ページ(8000字)以内
- ・論文  
図表を入れて刷り上がり6ページ(12000字)以内
- ・新著(デジタル媒体含む)紹介  
1葉の写真および500字以内の紹介文



## '98 PC Conference シンポジウム

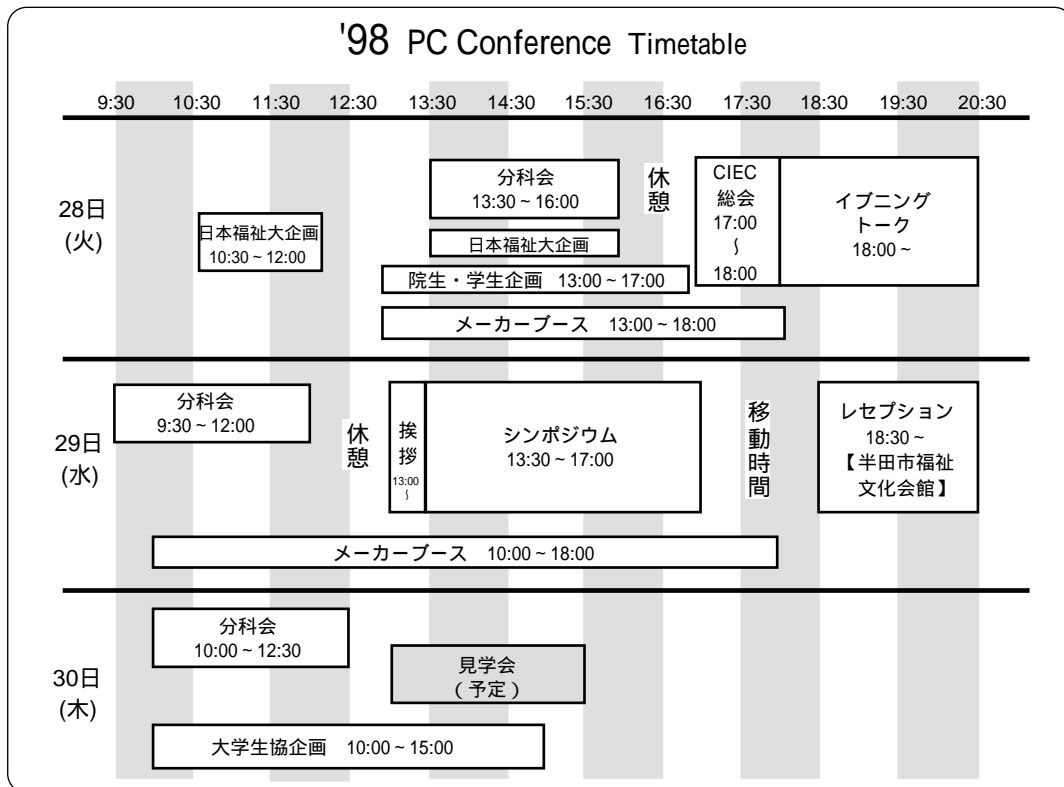
### コンピュータ利用教育の原点をさぐる ~教える側と学ぶ側からの問題提起~

私たちがコンピュータ利用による教育を行う上で、10年以上前からの教育実践の中でのさまざまな試みにもかかわらず、ポイントとなる「基本的問題」は大して変わっていないように思われます。そのポイントの一つは、いかなる教育であれ、教員の創意工夫が無ければ良い教育は成立しないという問題です。もう一つのポイントは欧米と基本的に異なっている点として日本にはキーボード文化が存在しないため、これがコンピュータ利用教育の導入に際して大きな障壁となっているという問題です。

そこで、今年のPCカンファレンスでは、教育工学の分野で精力的にご活躍中の赤堀先生（東工大教授）とキーボード教育に関して精力的な研究と経験をお持ちの大岩先生（慶応大教授）のお二人をパネリストに迎えて、「コンピュータ利用教育の原点をさ

ぐる~教える側と学ぶ側からの問題提起~」というテーマでシンポジウムを企画しています。パネリストとしては、お二人以外にコンピュータ利用教育を支える立場として大学生協から、また、学ぶ側の立場として学生・院生からそれぞれ1名の報告者を加えて、教育場面におけるコンピュータ事情で、何がどう欠けているかを考えながら、今後のコンピュータ教育の改善へ、ともに、新しい学びを創造していく方向を見つけ出したいと思います。

パネリスト：赤堀 侃司  
 （東京工業大学 教育工学開発センター教授）  
 大岩 元（慶応義塾大学 環境情報学部教授）  
 大学生協から1名 学生1名・院生1名  
 司 会： 小林 昭三（新潟大学 教育人間科学部教授）  
 三根 浩（同志社女子大学 短期大学部教授）



## メーリングリストによる 情報提供サービスについて

この度CIECでは、CIEC会員、会員外を問わず、個人または団体から提供があった情報のうち、会員やその他の方にお知らせする価値があると判断したものを、メーリングリストinformation@ciec.or.jpを利用して事務局が配信することになりました。

これまでは、ciec@ml.ciec.or.jp (ciec@crick.fish.kagoshima-u.ac.jpでも可) が会員からのお知らせを載せられる唯一のメーリングリストでしたが、今後はinformationに論文募集や、著書の紹介は勿論のこと、他学会や企業からのお知らせを掲載いたします。  
以下のような手順ですすめますのでよろしく願いいたします。

メーリングリストによる情報の受信をご希望の方は各自で、参加登録をお願いいたします。

```
information-ctl@ciec.or.jp宛てに  
サブジェクト未記入で本文に  
# subscribe  
# end
```

を入力して送信してください。  
(希望者には事務局で登録します。)

著書の紹介、研究会やシンポジウムのお知らせ、製品のご案内等、さまざまな情報をCIEC事務局 ciec-jim@ciec.or.jpまでご連絡ください。

メーリングリストへの情報の掲載は事務局がおこないますので、直接の掲載はご遠慮ください。情報への質問等は情報提供者へ直接お願いします。

このメーリングリストに掲載する情報は、CIECのホームページ  
<http://www.ciec.or.jp/>の公開掲示板でもご覧になれます。

## CIECで現在公開中の メーリングリスト

- 1 ciec@ml.ciec.or.jp  
コンピュータ利用教育に関する全般的な話題 (CIEC全会員対象)
  - 2 ciecnet@ml.ciec.or.jp  
ネットワークに関する話題 (主にネットワーク利用委員対象)
  - 3 students@ciec.or.jp  
学内のコンピュータ環境改善を目指して  
学生院生の交流(学生・院生その他どなたでも対象)
  - 4 information@ciec.or.jp  
お知らせ・宣伝 (CIEC全会員対象)
- 1と2は  
ciec-request@ml.ciec.or.jp  
ciecnet-request@ml.ciec.or.jp  
宛てに、メール本文の欄の先頭に、  
subscribeと入れて、メールして下さい。
- 3と4は  
students-ctl@ciec.or.jp  
information-ctl@ciec.or.jp  
宛てに、メール本文の欄の先頭に、  
subscribeと入れて、メールして下さい。

## CIECware/text

CIEC TypingClub (タッチタイピングMac版)  
<ftp://ftp.ciec.or.jp/pub/CIEC/Mac/TypingClub/>

Windows版は開発中

### 寄贈図書・CD-ROM

コンピュータとは何だろうか?  
綾 皓二郎(石巻専修大学 理工学部基礎理学科)  
藤井 亀(芝浦工業大学 電気設備学科) 森北出版

英語教育のためのパソコンとインターネット  
より効果的な英語教育を求めて  
北尾謙治(同志社大学 言語文化教育センター)  
北尾S.キャスリーン(同志社大学 短期大学部 英文  
学科) 洋販出版

Visual Basicと教育システム情報  
立田ルミ(獨協大学経済学部経営学科) 朝倉書店

INTERNET RESOURCES: ELT, Linguistics,  
and Communication  
北尾 謙治(同志社大学 言語文化教育センター)  
英潮社

かんたんマルチメディア 英検2級合格宣言  
(Windows95動作CD-ROM)  
三根 浩/吉田 晴世/吉田 信介/竹内 理/  
佐伯 林規江 松柏社